

## 真珠湾

1941年12月8日未明、日本軍は、ハワイオアフ島真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊及びその基地に対して奇襲攻撃を行いました。

日本軍の攻撃によって、太平洋艦隊は、戦艦8隻が撃沈又は損傷により行動不能となるなど大きな被害を受けました。その意味では、真珠湾における日本軍の奇襲攻撃は成功だったといえますが、結果は、アメリカを日本との全面戦争に引き摺り込み、日本の国土を焦土と化し、国民に甚大な被害をもたらすことになりました。

戦えば必ず負けると分かっているアメリカとの戦争に向かって、何故トリガーを引いたのか、戦争を知らない世代の私にとっては、未だに理解することができません。

1941年当時、日米の国力差は、GNP比でアメリカは日本の約1.3倍であり、機械工業力の差は歴然としていました。しかも、日本の国内には資源がなく、石油を初めとする重要な戦略物資は、アメリカやイギリス、オランダなどからの輸入に頼らざるを得ず、仮に、石油などの輸入がストップすれば、海軍はもとより日本全体が干上がってしまうことは、火を見るよりも明らかでした。即ち、日本がアメリカと戦争をするということは、ミニマム級とはいいませんがフライ級位の選手がヘビー級の選手とボクシングの試合をするようなもので、無謀極まりないものだったのです。

これに対して、アメリカがイギリス、オランダ、中国と共同して包囲網を造り（ABCD包囲網）、経済封鎖を行ったことによる日本国内の打撃は深刻で、近衛内閣はこうした事態を南部仏印進駐によって打開しようとしたものであり、アメリカとの戦争については、やむを得ない戦争だった、という人もいます。

しかし、当時においても、アメリカとの戦争は避けるべきだとの主張はあったのです。真珠湾攻撃を構想し、連合艦隊司令長官として指揮をした山本五十六も避戦論者であったといわれていますが、国論を形成するには至らず、結局

はアメリカとの戦争を止められませんでした。

当時の状況を考えると、中国からの撤退しか戦争を回避する方法はなかったと思われませんが、中国で血を流している陸軍にそのような考えはありません。また、海軍が動かない限りアメリカとの戦争は始まらないにもかかわらず、海軍も戦争回避の責任を負おうとせず、政府に判断を押しつけます。これに対して、近衛総理も強力なリーダーシップを発揮しようとはしませんでした。

当時日本は、日中戦争が泥沼状態に陥っており、中国との戦争に加えて新たにアメリカと戦端を開く余力はなかった筈です。

アメリカと戦えば負けると分かっているながら、戦争回避のための明確なビジョンを持たず、アメリカの力を過小評価し、根拠のない希望的観測によってアメリカとの戦争に傾斜していった、リーダー達の責任は重大だと思っています。

（塾頭 吉田 洋一）